校友時報

昭和62年12月18日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塚2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

生徒会"安岡丸"の船出

新役員決定

今年度の生徒会選挙は、生徒会副会長・応援団長、副団長が9月29日に、生徒会長が補選によって10月20日に決定する二段構えの役選となったが、全役員が自ら立候補する意気込みを示した。これからの生徒会の活躍に期待がかかる。

副会長、畠山さん

副会長、須藤君

会長、安岡君

生徒の無関心改善なるか

任期満了にともなう生徒会役員及び応援団長、副団長の立会演説会と信任投票が九月二十九日（火）に行なわれた。

今年は9月7日に行なわれた生徒総会で、副会長が従来の一名から、一・二年から各二名ずつの二名へと変更が改正され、二Dの須藤健吉君と二Eの畠山妙子さんが立候補し、信任された。会長は立候補者が信任投票の結果不信任となり、後日補欠選挙が行なわれることになった。しかし、テスト週間と重なったため、立候補者の受けつけはテストあけの十月十二日からとなり、十七日で締めつられた。会長には、二Bの安岡健一君が立候補し、十月二十日に立会演説会及び信任投票が行なわれ、即日開票の結果、信任された。新役員は次のとおりである。

生徒会長　安岡健一（二B）　信任　六二三
副会長　畠山妙子（二E）　信任　七五七
副会長　須藤健吉（二D）　不信任・その他　三〇六
応援団長　日沼直樹（二C）　信任　七一〇
応援団副団長　佐藤修（二G）　信任　七五七
応援団正副団長は信任投票の結果、次のように決定した。
また、応援団正副団長は信任投票の結果、次のように決定した。
応援団長　日沼直樹（二C）　信任　七一〇
応援団副団長　佐藤修（二G）　信任　七五七
応援団正副団長　畠山妙子（二E）　信任　五五七
応援団正副団長　須藤健吉（二D）　不信任・その他　四一三
応援団正副団長　須藤健吉（二D）　不信任・その他　二五〇
応援団正副団長　畠山妙子（二E）　不信任・その他　二一三

長期にわたって繰り広げられてきた生徒会選挙を振り返ってみると、今年は去年のように立候補者が出ずに各クラから二名ずつ推薦するという形ではなく、立候補者が出るという形で行なわれたことは評価された。しかし、立会演説会では、去年と同様に立候補者の真摯の自己アピールが事前に配布されたせいか、一言だけのあいさつで終わってしまう立候補者がほとんどで、その点ではやはり依然として、生徒の生徒会に対する関心の薄さが感じられた。

また、今年から生徒会副会長が一・二年から各二名となったことから各学年のつながりが緊密になり、各学年がうまくまとまって少しでも生徒の生徒会に対する関心が強まることが期待されている。

新会長も「来年の能高祭を大成功させたい。そのためには一般生徒の目を生徒会に向けさせたい。」と語っていた。

生徒の生徒会への無関心さが進むなか、何か生徒を引きつけるものとれをいかにするかが、安岡新生徒会長の腕の見せどころと言えそうだ。

部説

「当り前」とは

「当り前」という言葉がある。いつ頃から使われているのかはわからないが、我々が「当り前のことを言うな」「当り前じゃないか」などと、日常よく使っている言葉である。

では、「当り前」とは一体どういうことなのか、はたして皆がこの言葉の意味を理解して使っているのか。

辞典には「そうあるべきこと・当然・変わった所がなく、普通である。」と記されているが、我々が使っているのには、もっと利己的で傲慢な、自分の自尊心を満足させるためのような感じ、本当は理解できていないのに、理解しているように見せるために作られた言葉なのではないかという気がしてならないのだ。このようにほとんどの人にとって言葉の意味は理解されているのかというと、やはり疑問である。言葉の意味が分からずに、とんでもない所でひどい使い方をしている人もいるのだ。

ところで、最近あるニュース番組で「こんな当り前のことでさえ」と言っているのを聞いて疑問に思ったのだが、「当り前」、「当り前」と言っているが、一体どこまでが「当り前」で、どこが「当り前」の範囲もそれぞれ違ってくるのだから、その人が「当り前」とは思っていることでも、他の人々にとっては奇妙に見えたり、逆にとてもばかげて見えたりするものなのに、なぜ一つにまとめて境界線を引くことが出来るのか。

もし本当に境界線を引いてしまうとしたならば、今度は皆その規定にそっていが考えられない。何のおもしろ味もなく、没個性化してしまうことになる。これもまたこれである。

日頃、何気なく使っている「当り前」という言葉は、誰かが境界線を引いただけで、個性を奪ったり、それとは違ってとても利己的で傲慢な言葉になるのだ。

「当り前」という言葉、実はとても悲しい言葉なのである。

英語の秋あれこれ

宮腰さん（3C）東北弁論で優勝

ホルブルック先生本校で授業

九月十一日（金）県北の高校の英語指導のため来日中のマーク＝ハワード＝ホルブルック先生が来校された。

先生は八月から能北高で教えられているが、本校でも生徒に生の英語に触れさせる目的で招かれたものであり、この日は三校時に二F、五校時に二Cの授業を受けもたれたほか、放課後は有志生徒との交流も楽しまれた。

授業は二Cがグラマーで英問英答を主に、二Fはリーダーで教科書の読み方に重点をおいたものであった。両クラスとも先生の自己紹介の後、生徒が先生への様々な質問をした。初めは、先生のその発音とスピードに目をまるくしていた生徒たちも、普段とは違う英語のおしゃべりに慣れると「能高にも外人の先生がいればいいのに」との声も聞かれた。

また放課後は、約四十人の生徒と質問あったり、連想ゲームをするなどまさに楽しみながらの交流会が設けられた。

トロフィーを手にした宮腰さん

先生は、アメリカ・ワシントン州出身でスポーツが得意とのことまた滞在中は「漢字を勉強したい。」とも語られていた。

英語に生きたい（宮腰さん）

今回は、先の東北英語弁論大会で優勝した宮腰陸子さん（三C）にインタビューしました。

―大会での感想は？

「緊張した。他の大会（東日本大会）に出たとき、関東の私立高生のすばらしいスピーチをたくさん聞いてきたから、自分では優勝できるレベルではないと思っていたけど、精一杯やった」

―"My Determination to Learn English with Self-discipline and a Fixed Aim"なぜ、この題にしたのですか？

「中一から、毎年スピーチをやっているが、その度に自分の英語の勉強の仕方をみつめ直してきた。英語を勉強しはじめた動機がただ興味があったということだけだった。最近、固い目標をもって勉強した人が強いということに気付いた。今年は高校生活で最後のスピーチとなったから、大学で勉強するための心がまえをはっきりさせたかったから。」

―最後に、今後の目標と将来の希望は？

「目標は大学進学です。将来は、英語を一生勉強したいから、英語を使う職業につきたい。特に英語教育に関心があるから、その関係にたずさわりたい。」

宮腰さんの出場した他大会の結果

第三十六回全日本高校英語弁論大会　東日本大会　四位入賞
同　全日本大会出場
第三十回秋田県高校英語弁論大会　優勝（二連勝）

東北英語研究会

十月十六日（金）、本校を主会場に第三十七回東北（県英語教育研究大会が行われた。この大会は東北地方の中学校、高校の英語教育に関する諸問題を研究協議し、その振興を図ることを目的として開かれた。「自ら学ぶ力を育てる英語教育を目指して」という大会テーマのもと、日本女子大学教授井出祥子先生による講演、公開授業、分科会が行われた。公開授業高等学校の部では、本校の英語科関中弥先生が二年E組を対象に授業をされた。関中弥先生は、「この授業で英語を使って授業を行っているとゆ、これから先、改良を加えて、訳読中心の授業を抜け出そうとしているという姿勢を示したかった。」と語られた。

また、十七日（土）、会場を能代文化会館に移し、第三十五回東北（県中学校・高等学校英語弁論大会が開かれ、本校の宮腰陸子さんがみごと高校の部で優勝した。

出来事

7月25日	（土）	吹奏楽部定期演奏会
8月18日	（火）	始業式
8月28日	（金）	一斉テスト
9月6日	（日）	40km強歩　優勝　大山正広君（二C）　赤木訓子さん（二C）
9月29日	（火）	生徒会役員選挙　立会演説会投票 副会長　須藤健吉君（二D） 畠川妙子さん（一E） 団長　日沼直樹君（一C） 副団長　佐藤　修君（一G）
10月6日	（火）	中間考査（9日まで）
10月16日	（金）	東北英語研究会（17日まで）
10月20日	（火）	生徒会役員補欠選挙 会長　安岡健二君（二B）
10月23日	（火）	芸術鑑賞　東京芸術座 「12人の怒れる男たち」
10月28日	（水）	共通一次出願（169名）
10月29日	（木）	献血（123名）
11月19日	（木）	修学旅行一班出発
11月20日	（金）	修学旅行二班出発
11月25日	（水）	三年生球技大会
11月10日	（水）	期末考査（14日まで）
12月18日	（金）	終業式

いよいよ本格化　進学・就職

本校では十月二十八日に六十三年度共通一次の願書を提出し、三年生はいよいよ本格的な受験シーズンへ突入した。

本校の共通一次出願者は実数では去年より七人減少（昨年は一学級増）。また私立専願者は去年より三十六人減少、国私併願者は五人増加し、国公立大学の受験者が合格安全圏内の私立大学と併願するという安全志向が強まっていると考えられる。短期大学の希望者は去年より二人、専門学校の希望者は去年より三人増加した。

今年の推薦入学者数は、十二月八日現在で合格が判明したのは二十三人で、今後国公立大の推薦が加わることから若干の増加が予想される。

来年は国公立大学入試が改革されて二年目になるが、今年は更に手が加えられた。まず、A・Bグループ分けの一部変更や、二次出願が共通一次終了後にできることになったため、事実上自己採点制度が復活したことと、A・B日程の間が広がったこと、足切り倍率の緩和など傾変わりを見せている。

一方、今年の公務員希望者数は七十一人で、国家公務員一次試験合格者は二十八人。

また民間企業で現在十五人が内定し、去年のこの時期の十六人と共に一昨年の二十九人を大幅に下回り、近年、民間企業の厳しさは本校にも確実に反映しているものと思われる。

進学・就職状況（12月現在）

	62年度（%）	61年度（%）
共通一次出願	169（50.4）	176（47.7）
私大専願	68（20.3）	105（28.2）
短大	11（3.3）	10（2.7）
専門学校	16（4.8）	13（3.5）
公務員	71（21.2）	64（17.3）
合計	335人	369人
国私併願	78（23.3）	73（19.8）

田中君推奨

県写真展

十一月十二日から十六日までの四日間、秋田県教育委員会と秋田県高等学校文化連盟写真部会主催の、六十二年度高校文化祭総合美術展が行われた。この美術展に本校からは写真部門に四点出品しており、そのうち推奨が一点、入選が二点という好成績だった。入賞者は次の通りである。

推奨
「Dark Zone」　一G田中　智

入選
「熱唱」　二C児玉秋一
「旅行計画」　二E高山祐樹

また、十一月六日から八日まで能代文化会館において行われた第二〇回能代山本総合美術巡回展でも、児玉君と田中君は、それぞれ特選・準特選に選ばれている。

顧問の高橋敏章先生は、「現像、プリント、パネルはなかなかの技術的な面もすぐれており、自風写真特有のよさが出ていたのでしょう。」と語られた。

三点

▼県教育委員会が、県立高校の来年度からの新設学科を発表した。英語科・電子機械科・産業技術科・生活科学科などである。能代山本地区では、能代北高に英語科、能代農業・産業技術科が新設される。また、二ツ井高校は家政科を、能代農業は生活科をそれぞれ一学級ずつ転科して、生活科学科とした。▼本県の高校進学率は年々高まっており、現在では、九七・八％という高い割合である。しかし、その反面、せっかく入学した学校が、自分に合わなかった、という理由で中途退学する人も少なくない。また、希望になった高校がなかなか見つからない等という人にも、この新設学科の導入は、「投資ということになるのではないだろうか。新設される学科のほとんどが職業学科だという点に、ますます複雑化が進行する産業構造の変化や技術革新への対応の意図がうかがえる。加えて、各種の学科が新設されていくということは、高校受験者の進路の幅が広がるということで、受験者たちにとっては、入りにくかった高校の門がなくなったともいえよう。▼これら新設学科が設置される高校では、来年度から生徒が募集される。現在の中学三年生が、この新しい学科に先陣を切って挑戦するということになる。新制度施行一年目は、とかく戸惑いはつきものだが、ことは、高校教育発展のため、将来の日本を支える若者たちのために、ぜひ好結果を期待して止まない。▼さて、この再編計画だが、我が能代高校に関しては、今のところ全く無風状態である。もし、今後、新設学科が導入されるとすれば理数科というわさが、一部に取り沙汰されてはいるが、理数科は大振いなのか、現状の声でもある。この学科の導入に対して積極的な動きは、今現在見られないが、第三次高校再編計画における、昭和七十年度までの長期計画の一環といわれているので、今後の動きが注目される。